水産情報速報版

H18.11.24　№1219

静岡県漁業協同組合連合会
☎054-254-6011　Fax054-253-9343
編集・発行＝指導部漁政課
URL:http://www.jf-net.ne.jp/sogyoren/

１．気象庁が10月の監視速報を発表　エルニーニョの可能性が高い

気象庁はこのほど、10月の太平洋赤道域の海水温などの状況と、エルニーニョ監視海域(北緯5度～南緯5度、西経150度～90度)における海面水温の今後の見通しを発表しました。

それによると、10月のエルニーニョ監視海域での海面水温は基準値との差がプラス0.9℃で、太平洋赤道域の海面水温は、ほぼ全域で平年より高く、日付変更線付近及び東部では、平年より1℃以上高い海域が見られました。同庁は、監視海域の海面水温が、冬の間は基準値よりやや高い値で推移し、春には基準値に近づくことを予測しています。また、太平洋赤道域中部～東部にかけては、海面水温は平年より高い状態が冬の間持続し、エルニーニョ現象となる可能性が高いとしています。

エルニーニョとは、ペルー沖でクリスマスの頃から南東貿易風が弱まり、赤道海域から暖水塊が流れ込むために海水温が上昇する現象で、カタクチイワシの不漁や沿岸地域への集中豪雨、数年に1度の大規模な異常高水温現象をもたらします。

２．遊漁船安全指導講習会を各地で開催　　－県遊漁船業協会－

県遊漁船業協会では11月22日、由比町中央公民館において、清庵地区の遊漁船業者60名が参加して、安全指導講習会を開催しました。

今年の講習会は、去る10月8日発生した神津島沖の遊漁船転覆海難事故を受け、例年2月に実施している安全指導講習会を前倒しして開催します。

講演は、横浜地方海難審判庁垰田事件係長、伊東審判官より「海難審判とは」、「遊漁船の衝突海難」について、また、清水海上保安部佐藤港務係長、陸調査官より「漁船海難防止」、「ミックス」についてそれぞれ行われました。

また、県水産資源室秋津主幹から、「遊漁船業における利用者の安全確保」について説明が行われ、特に救命胴衣の着用や、利用者名簿の作成など法令を遵守するよう指導しました。

講習会に参加した遊漁船業者は、遊漁船転覆海難事故の刺激もあり、事故防止に対する関心も高く、熱心に講演に聞き入りました。今後同協会は、他6会場で安全講習会を計画しています。

３．藻場回復に向けてのシンポジウムが開催される

(独)水産総合研究センターでは11月6日、磯焼けの原因として知られるアイゴをターゲットとして、磯焼けとアイゴの関係に関する情報提供と、アイゴの魚食普及を図ることを目的として、御前崎海鮮なぶら市場(御前崎市)において、榛南地区の漁業関係者、行政担当者、研究機関・大学の研究者等約120名が出席し、シンポジウム「アイゴを食べて藻場を回復」を開催しました。

藻場が大規模に枯れて消滅する磯焼けは全国的に起こっており、榛南海域も深刻な磯焼けが続き、漁業に大きな影響を与えています。その主な原因として、アイゴなど海藻を食べる魚(植食性魚類)による食害が考えられています。

今回のシンポジウムでは、水産工学研究所や和歌山県・長崎県・本県の水産試験場、東京海洋大学などの研究者が藻場回復に向けて、磯焼けとアイゴの植食性魚類に関する調査情報の紹介や、料理・加工流通などを通した食用利用の現状と取り組みなどについて報告され、参加者との意見交換が行われました。

また、アイゴの漁獲及び利用の増進を通じてこの魚の(生息)密度を抑え、藻場を回復することに期待を込めて、アイゴの食用利用に関する事例紹介や試食会を行い、榛南地区でのアイゴの食用利用・魚食普及推進を訴えました。

４．冬の味覚　カキの季節到来

冬の味覚を代表する浜名湖産カキの水揚げが、浜松市舞阪町で本格化しています。

カキの水揚げは、平年並みの今月初旬にスタートし、舞阪町養かき組合の組合員は、早朝より奥浜名湖や舞阪町内の浜名湖のカキ棚に出漁し、大きく育ったカキを船に積み、同組合前の船だまりなどで水揚げをし、カキむき工場へと運んでいます。

浜名湖産のカキは、近辺の個人店舗や浜松中央卸売市場、静岡、名古屋方面に出荷され、小売価格は例年並で推移しています。

また昨年は、赤潮等有害プランクトンや雨の影響で、成長が悪い状態が続きましたが、今年は順調に育ち、生産者も胸をなで下ろしています。

５．天然アユ復活をテーマにシンポジウム開催

天竜川漁協などでつくる「天然アユ保全ネットワーク」がこのほど、浜松市舘山寺町において、「天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム」を開催しました。

天竜川で捕れる天然アユは年々減少し、今年は、昨年を大幅に下回る漁獲量となりました。種苗生産して放流されるアユは、天然アユに比べて病気に弱く、縄張り意識も薄いことなどから、友釣り愛好者からも不評です。

このような背景の中、危機感を持った天竜川漁協は、天然アユ増加に取り組む矢作川(愛知県)、物部川(高知県)の各漁協を視察してネットワークを設立し、今回のシンポジウムを企画しました。

シンポジウムには、内水面漁業関係者や行政担当者等約300人が参加し、関西学院の古川彰教授より「環境漁協宣言のあとさき」と題した基調講演が行われたほか、産卵場造成に関する技術解説、資源保全のための取り組みなどが報告されました。

引き続き、釣り人として名高い大西 満氏(大阪府)の講演や、3漁協の組合長と大西氏によるパネルディスカッションが行われました。

６．会議・日程(11月28日(火)～12月11日(月))　　－既報分省略－

11月28日(火)　県漁連＝県漁協組合長会議実行委員会　(県水産会館)
12月 2日(土)　県桜えび漁業組合＝船長部会/出漁対策委員会　(ブケ東海)

－訂正－　本紙№1218(11/17)掲載の諸会議・日程のお知らせの中で、自民党県連・農林水産対策連絡協議会陳情の会場は、クーポール会館(静岡市葵区)の誤りですのでお詫びして訂正します。